

ローマ、ビジョンを確立する - ナンバー12

預言の三重の適用：荒廃をもたらす忌まわしいものと終末に逃げよとの警告

Jeff Pippenger

2024-08-31

預言者ダニエルが語った「荒らす憎むべきもの」は、三つの異なる時代において、キリスト者が逃れるべきしるしである。エルサレムのキリスト者は、紀元66年、ローマ軍の軍旗がエルサレムを取り囲むのを見たとき、逃れた。五世紀末から六世紀初頭のキリスト者は、神の神殿で自分は神であると宣言する「不法の人」を見たとき、荒野へ逃れた。1888年には、ブレア上院議員がアメリカ合衆国議会に一連の日曜法案を提出した。それらはブレア法案と呼ばれ、日曜日を国家的な礼拝日として定めようとする試みであった。日曜礼拝は獣の刻印、すなわち教皇権のしるしであり、アメリカ合衆国憲法は、合衆国市民への試金石とする形で国家宗教を強制することに真っ向から反対している。

アメリカ合衆国を現代のローマと見なすことに関連した誤った適用から抜け落ちているのが、まさにこの事実である。預言の三重適用には、その適用を律する特定の規則がある。これらの規則は、第三の成就の預言的特徴を確立するために、第一の成就の預言的特徴を第二の成就の預言的特徴と組み合わせるべきであることを定めている。

避難せよという警告は、やがて来る迫害から逃れよという警告である。キリストの時代におけるその迫害は、西暦70年のエルサレムと神殿の破壊であった。その迫害が近いことを告げるしるしは、西暦66年に与えられた。五世紀末から六世紀初頭における避難の警告は、異教ローマを象徴する予言的な「ペルガモ」の離反を認識することとして、パウロによって示されていた。まず背教が起こり、そののちに、自らを神と宣言する「罪の人」が現れることになっていたのである。538年に至る歴史の中で、抑制していた、すなわちパウロの言葉で言えば「withholdeth」であった異教ローマが取り除かれ、ペルガモが離反し、「逃げよ」のしるしが到来して、忠実な者たちに教皇派教会の交わりから分離するよう指し示した。やがて538年、オルレアンの会議で教皇権が日曜法を制定し、教皇による千二百六十年の迫害が始まった。

最初の二人の証人は、キリストによって与えられた逃げるようにとの警告の第三の成就が、実際の迫害に先立っていたことを明確に示している。エルサレムの破壊は、西暦66年にケスティウスの包囲が始まってからちょうど三年半後に起こり、これによって、ティトウスによって開始され神殿と都市の破壊で終わった第二の包囲の惨禍に先んじて、キリスト者たちは逃れることができた。538年に先立ち、キリスト者たちは教皇ローマの教会から分離し、預言的に荒野へと逃れたが、これは霊的なエルサレムの滅亡を表している。

しかし、神殿の外の庭は除外し、測ってはならない。そこは異邦人に与えられているからである。彼らは四十二か月のあいだ聖なる都を踏みにじるであろう。また、わたしはわたしの二人の証人に権威を与える。彼らは荒布をまとって千二百六十日のあい

だ預言するであろう。ヨハネの黙示録 11:2、3.

逃げよとの警告の二つの例においては、いずれも警告が迫害に先立ち、迫害は、異教であれ教皇制であれ、ローマが文字通りまたは霊的なエルサレムを踏みにじることとして描かれている。セブンスデー・アドベンチストにとっての逃避の警告は、1888年のブレア法案であった。異教ローマの歴史における最初の成就では、キリスト者はエルサレムから逃れるべきであり、教皇ローマにおける成就では、キリスト者は荒野へ逃れた。アドベンチズムにおいては、その警告は田園地帯へ逃れることであった。

今は、神の民がこの世に心を向けたり、この世に宝を蓄えたりしている時ではない。初期の弟子たちのように、荒れ果てた人里離れた場所に避け所を求めざるを得なくなる時は、そう遠くない。ローマ軍によるエルサレム包囲がユダヤ地方のキリスト者たちにとって退避の合図であったように、教皇の安息日を強制する布告において、わたしたちの国が権力を行使することが、わたしたちへの警告となるだろう。その時こそ大都市を離れる時であり、それは、のちに小さな町々も離れて、山中の人里離れた場所にある隠れ住む家へ移るための準備となる。『証言』第5巻、464ページ。

「教皇の安息日を強制する法令において、わが国が権力を行使することは、私たちへの警告となるだろう」ということは、マルコの言葉に従って、荒廃をもたらす憎むべきものが「立ってはならない所に立っていた」ときに成就した。1888年、アメリカ合衆国議会は憲法の主要要素に真っ向から矛盾する法律を審議しており、その時点でセブンスデー・アドベンチストは都市を離れて田舎へ移るべきであった。

エルサレムの滅亡に際して、キリスト教徒は一人として命を落とさなかった。キリストは弟子たちにあらかじめ警告しておられ、彼の言葉を信じた者は皆、約束されたしるしを見張っていた。……彼らは直ちに、ヨルダン川の向こう、ペレア地方にある安全な場所、すなわちペラの町へ逃れた。『大いなる論争』、30。

逃げよとの警告の最初のしるしに備わる預言的特徴は、第三にして最終の成就を表している。時として、その預言的特徴は、第三の成就の中で二重成就を生み出す。その一例が三つのエリヤである。イゼベル、アハブ、そしてバアルの預言者たちと対峙したエリヤの型に、第二のエリヤであるバプテスマのヨハネがヘロデヤ、ヘロデ、サロメと対峙した際の特徴が結びつくことで、三重の適用の第三にして最終の成就是常に終わりの時に起こること、そしてその終わりの時にエリヤとヨハネが神の民の二つの区分を表すことが示される。エリヤに代表される一方の区分は死なず、ヨハネに代表されるもう一方の区分は死ぬ。この二つの区分は、ヨハネの黙示録7章でも、死なない十四万四千人と、死ぬ大群衆として表されている。

三つのバビロンに共通する預言のメッセージの要素は、第一のバビロンはニムロドに代表されるが、第二のバビロンは最初と最後の王、ネブカドネザルとベルシャツアルに代表されるという点である。ネブカドネザルはバビロンにあって救われる者たちを、ベルシャツアルはバビロンにあって滅びる者たちを代表している。

終わりの時代には、聖書の預言の主題となっている二つの日曜法がある。一つは、アメリカ合衆国で間もなく施行される日曜法であり、もう一つは、全世界に強制される日曜法である。これら二つの日曜法は、異教ローマの日曜法によって予表されていた。すなわち

、321年にコンスタンティヌスが最初の日曜法を施行し、その後538年に教皇ローマの日曜法が続いた。異教ローマは、アメリカ合衆国を前もって示すいくつかの預言的な型の一つであり、321年の日曜法は、アメリカ合衆国において間もなく施行される日曜法を予表している。538年の教皇ローマの日曜法は、全世界に強制される日曜法を予表している。ダニエル11章の「略奪者」によってアメリカ合衆国が表されているとする誤った見解は、アメリカ合衆国で間もなく施行される日曜法を証拠として用い、アメリカ合衆国のこの日曜法が同国を現代のローマであると証明すると主張しようとするが、竜と獣と偽預言者の三者連合によって世界のあらゆる国々に強制されるもう一つの日曜法があることを無視している。

もし米国における「日曜令」が、米国を現代ローマであると特定するものだというなら、全世界的な「日曜令」は何を特定するのか。三つのローマの証言は、三重である現代ローマが二つの別個の「日曜令」を施行することを示している。第一は米国におけるもので、321年のコンスタンティヌスの「日曜令」によって予表され、第二は全世界に及ぶもので、538年の教皇権による「日曜令」によって予表されている。預言の三重適用という文脈で米国の「日曜令」を取り上げ、それが現代ローマを証明するのだと主張することは、異教ローマと教皇ローマによって確立された預言的な特質を無視することになる。終わりの時には二つの別個の「日曜令」があるが、どちらも「民の略奪者がアメリカ合衆国である」と特定する証拠にはならない。現在行われているように、異教ローマと教皇ローマの証言を私的解釈を支えるために歪めるなら、その私的解釈を擁護しようとしている者たちが型と反型を理解していないことが明らかになる。

異教ローマはアメリカ合衆国の型であり、教皇ローマは現代ローマの型である。こうした預言の三重適用の誤用と、教えが「型と反型」の文脈に置かれているとする主張に加えて、預言の三重適用の文脈で示されているとおりに「荒らす憎むべきもの」を定義することに失敗しているという、もう一つの問題がある。

西暦66年から70年にかけて、ローマの二人の将軍がエルサレムを攻撃した。ケスティウスとティトゥスはいずれも包囲から戦いを始めたが、短期間とはいえ包囲を解いて退いたのは一方だけであり、そのことが神の摂理によりキリスト者の避難を可能にした。キリスト者が逃げるべきしるしを認めたのは、ケスティウスによる最初の包囲の時であった。西暦70年にエルサレムに対する戦いを続行するためティトゥスが到着したとき、彼は包囲から始め、エルサレムと神殿が破壊されるまでやめなかった。イエスの警告は二段階から成っている。第一は逃げるべきしるしであり、その後には迫害が来る。5~6世紀にこの警告が成就した際、キリスト者は538年以前に墮落したローマ教会から離脱し、その後には迫害が始まった。

パウロは、古代イスラエルの記録された歴史はすべて終わりの日に生きる人々のために書かれたものであり、またそれらの歴史はすべて「型」であったことを、きわめて明確に述べている。もっとも、「型」を意味するギリシア語「typos」は、この真理についての彼の古典的な論述では「ensamples」と訳されている。

これらのことは皆、彼らに起こったのは、私たちに対する模範としてであり、また、それらは、世の終わりが臨んでいる私たちへの戒めとして書き記されたのです。コリ

ント人への第一の手紙 10章11節.

パウロがこの真理の文脈を与えるために用いている第10章の歴史的記述は、古代イスラエルが正しく行動した歴史ではなかった.

しかし、彼らの多くを神は喜ばれなかった. 彼らは荒野で打ち倒されたからである. これらの出来事は、私たちが彼らのように悪いものをむさぼり求めないようにするための戒めとなった. あなたがたは、彼らのある者たちがそうであったように、偶像礼拝者になってはならない. 「民は座して食べたり飲んだりし、立って戯れた」と書いてあるとおりである. また、彼らのある者たちがしたように、淫行をしてはならない. ある者たちはそれをして、一日に二万三千人が倒れた. また、彼らのある者たちがしたように、キリストを試みてはならない. 彼らは蛇によって滅ぼされた. コリント人への第一の手紙 10:5-9

聖史は、神の民の義と不義の双方を記録したものである. しかし、いずれの記録においても、その歴史は終わりの時代に生きる神の民の型であり続ける. 1888年のミネアポリスにおける反逆の歴史は、アドベンチストの歴史家たちの主張に反して、不義の記録である. その反逆はあまりに深刻で、エレン・ホワイトは会合を去る決意を固めたが、天使が、モーセの歴史におけるコラ、ダタン、アビラムの反逆に対応する反逆を記録するためにとどまるのは彼女の責務であると告げたため、彼女はとどまった. その会合において、黙示録18章の力ある天使が降臨したが、その天使がもたらしたメッセージは退けられた.

その歴史は、ニューヨーク市の巨大なビル群が崩れ落ちた2001年9月11日を予表していた. その歴史には、ブレア上院議員が提出しようとしていた最初の日曜法案が含まれていた. 彼が日曜日を国家的な礼拝日として強制しようとする試みは失敗したが、それは終末を予表する聖なる歴史の一部であった. ブレア上院議員の法案は、都市から逃れるべきだという警告であった. 1888年以前、ホワイト夫人が都市の外で生活する必要性について語ったとき、彼女は未来のこととして語っていた. 彼女は、神の民が近い将来、田舎へ移り住まなければならない時が来ると示した. 1888年以降、ホワイト夫人が田舎生活の必要性に言及するたびに、その勧告は、すでに田舎にいるべき時が到来しているという文脈に置かれていた. 1888年のブレア法案は、ルカの言い方を借りれば、本来あってはならない場所における日曜遵守の強制のしるしであった. 日曜遵守の強制は合衆国議会に持ち込まれるべきではなかった. なぜならそれは、憲法の基本原則の否認であったからである.

1888年の歴史は、2001年9月11日に始まった預言的歴史を型どるために記録された. 1888年のブレア法案は、2001年の愛国者法を型どっていた. それは、獣のしるしの実際の強制に先立つ警告であった. キリストに従う者は誰も、2001年9月11日以降は都市に住むべきではない. それは、神の民に逃れるよう導いた預言的な包囲であった. そして、異教ローマと教皇ローマの「日曜令」に象徴されるように、終末の預言的モデルでは二つの日曜令が主題となっているが、そのどちらにも、逃げよという警告が先立つ.

セブンスデー・アドベンチストであると公言する人々は、間近に迫る日曜法に先立って都市から田舎へ逃れるべきしるしとして、愛国者法を預言的に認識すべきであった. その同じ日曜法こそが、なおバビロンにいる神の他の群れにとって、すべての国にもたらされる日曜遵守の強制に先立ってバビロンから逃れ出るべきしるしであった.

「宗教の自由の地であるアメリカが、良心に強制を加え、偽りの安息日を尊ぶことを人々に強いる点で教皇制と手を結ぶようになると、地球上のあらゆる国の民はその手本に倣うよう導かれるであろう。」 Testimonies, 第6巻、18.

「三つのエリヤ」の三重適用が、終わりの時代に神の民には二つの区分があることを示しているのと同様に、「ローマ」の三重適用は、二つの別個の日曜法が存在することを示している。アメリカ合衆国こそ「あなたの民の暴虐な者たち」であり、したがって合衆国の預言的役割が「幻を確かなものにする」と主張しようとする人々は、アメリカ合衆国で間もなく制定される日曜法こそ、キリストがご自分の民に差し迫る迫害から逃れるための警告として示された「荒らす憎むべきもの」であると示唆する。彼らは、逃避の警告のしるしである包囲と、日曜法の施行が実際に始まって終末の迫害が始まることを表す第二の包囲との区別を見いだせていない。彼らはまた、終わりの時代に預言を成就する相互に異なる二つの日曜法があるという、二人の証人によって確立された区別にも対処していない。そうすることで彼らは、アメリカ合衆国で間もなく施行される日曜法が、預言者ダニエルの語った「荒らす憎むべきもの」として示された警告であると主張する。そしてそれは確かにそうなのだが、彼らの定義するような意味ではない。

アメリカ合衆国における日曜法は、なおバビロンにとどまっている神の他の群れに対し、バビロンとの交わりから逃れ出るようにとの警告である。したがって、それは、すべての国々に施行される来たるべき日曜法の警告でもある。

「諸外国はアメリカ合衆国の手本に倣うだろう。たとえ米国が先頭に立つとしても、同じ危機が世界の至る所で私たちの民に及ぶであろう。」 『証言』第6巻、395頁。

彼らの主張は、アメリカ合衆国における日曜法が、預言の幻を確立する象徴としてアメリカ合衆国を指し示しているというものだが、キリストが与えた逃げよとの警告という文脈では、その日曜法は、十一時の働き人に対しバビロンから逃れるよう促す世界的な警告を意味している。

ホワイト夫人が逃げるようにという警告について述べる時、彼女は全世界に及ぶ日曜法の問題を取り上げている。その運動はアメリカ合衆国における日曜法から始まる。彼女は、アメリカ合衆国における日曜法が、やがて来る迫害の警告であると示している。

神の律法に背いて教皇制を強制する布告によって、わが国は義から完全に離反する。プロテスタント主義が深い溝を越えて手を差し伸べローマの勢力の手を取るとき、さらに深淵を越えて手を伸ばし心霊主義と手を結ぶとき、この三者連合の影響のもとで、わが国はプロテスタントかつ共和主義の政府としての憲法のあらゆる原則をことごとく退け、教皇制の偽りと惑わしを流布するための手立てを講じるようになる。そのとき私たちは、サタンの驚くべき働きが現れる時が来たこと、そして終わりが近いことを知るであろう。

ローマ軍の接近が弟子たちにエルサレムの差し迫った滅亡のしるしであったように、この背教もまた、神の寛容の限界に達し、わたしたちの国の不義の分量が満ち、憐れみの天使が二度と戻ることなく飛び去ろうとしていることを告げる、わたしたちへのしるしとなりうる。やがて神の民は、預言者たちがヤコブの苦難の時と描写した、患難と苦悩の光景のただ中へと投げ込まれる。忠実にして迫害されている者たちの叫び

が天に上る.そして、アベルの血が地から叫んだように、殉教者たちの墓から、海の墓所から、山中の洞窟から、修道院の地下墓所からも、神に向かって叫ぶ声がある.
「聖にして真実なる主よ、地に住む者たちに対して私たちの血のために裁き、復讐してくださらないのは、いつまでですか。」『証言』第5巻、451頁.

ホワイト夫人は、アメリカ合衆国における日曜法を指摘し、それを、同国に対する恵みの時が終わったことを示す「しるし」であると述べている.だが、世界の他の国々にいる神の民も同じ試練に直面することになる.アメリカ合衆国の「日曜法」から、ミカエルが立ち上がり、人類の恵みの時が閉じられる時までの間には、一定の期間がある.それが閉じられるとき、「憐れみの天使は飛び去る」.